

わが国における須恵器生産の開始について

酒 井 清 治

はじめに	4 須恵器生産の開始年代
1 須恵器工人と集落	5 渡来人と管掌者
2 各地の初現期須恵器窯	6 朝鮮半島出土の須恵器と須恵器類似品
3 初現期須恵器の系譜	おわりに

論文要旨

わが国に須恵器が最初に伝わったのはいつ、どこからであろうか。

陶邑窯跡群を始めとする窯跡の調査は須恵器研究に多くの情報をもたらせたが、須恵器を生産した人々はどこに住んで、どのように暮らしたのか検討されることはなかった。近年の調査は陶邑周辺の集落遺跡に及び、工人集落として論議されるようになってきた。しかし、その論議は、工人集落の認定が明確でなかったため、深化することはなかった。

本稿では工人集落について現在どのような研究段階にあるのかをたどり、工人集落と呼ばれている遺跡も、須恵器生産にさまざまな形で関わっていたこと、今後、窯と集落、工房を結ぶ多様な研究が必要であることを確認した。

また、わが国の須恵器は初現期の段階には、各地で生産が開始されていたが、それぞれの特徴から大庭寺窯跡は慶尚南道東部、朝倉窯跡群は慶尚南道西部、陶邑窯跡群は慶尚南道西部から全羅南道にかけてと、系譜の違いが明らかとなった。その工人は、朝鮮半島における戦いを含めた交流によってわが国に渡来し、各地域首長層のもとで始まった多元的開始であったといえよう。しかし、中央政権に近接していた陶邑では、生産が開始されてからすぐに、全羅南道を中心とした地域からの工人が渡来し、わが国の須恵器が完成し、中央政権によって製品と技術が全国に伝わったようである。わが国と全羅南道との交流は、朝鮮半島で出土する須恵器と、朝鮮半島で作られた須恵器に酷似した須恵器類似品からも窺える。

須恵器が最初に作られ始めた時期は、大庭寺窯跡の製品に見られる新羅的要素から朝鮮半島の釜山周辺に新羅が侵攻し、その地域の土器が新羅の影響を受け始めた時期の420年から430年頃であろう。